

科学技術政策担当大臣と有識者議員との会合 議事概要

日 時 平成 22 年 9 月 16 日 (木) 10 : 00 ~ 11 : 25

場 所 合同庁舎 4 号館 742 会議室

出席者 平岡副大臣、津村政務官、相澤議員、本庶議員、奥村議員、白石議員、青木議員、中鉢議員、金澤議員、泉統括官、梶田審議官、岩瀬審議官、大石審議官

議事概要

議題 1 . 2010 年国際科学コンテストの結果について

< 文部科学省 板倉基盤政策課長説明 >

青木議員 参加する学生はどのように吸い上げているのですか。吸い上げているっておかしいですけども。例えば、高校野球や何かだとかかなり定式化したピラミッドがあるわけですよ、登っていく。そういうのが何かあるのですか。

文部科学省 これにつきましては、全国各地でまず第一次試験を行っております。近くの高校などで、筆記であるとか、あるいは物理の場合はレポートを出すような課題を課しているのですが、まず第一次試験を課します。そこで一定数の上位になった者が今度は第二次試験というような形に進み、強化合宿のような中で成績が良い者がさらに選ばれて、最終的には代表まで行き着くというような形になっております。

青木議員 そうすると、その一次試験の情報というのはどうやって生徒さんに伝わっているのですか。

文部科学省 各団体からも行っておりますが、科学技術振興機構あるいは文部科学省のほうから各高等学校に文書を流して参加を呼びかけ、あるいはいろいろなところを回るような形で周知をしているところでございます。

青木議員 では、学校単位というか、学校の物理学科単位とかクラブ単位ということになっているのですか。

文部科学省 申し込みににつきましては個人で手を挙げるような形になっておりますが、文書等の案内につきましては組織のほうにきちんと行って、今度は学校内で共有してもらおうような形でやっております。

奥村議員 例えば本戦に出られたような実績をとると、その後の大学入試が無試験だとか、何かそのような、実利的なメリットがあるのですか。

板倉基盤政策課長 ございます。これは各大学が独自にそういう制度をつくるわけでございます。いわゆる A O 入試ですね。アドミッション・オフィス入試の中で、実際に優遇措置をとるという大学は結構増えてございまして、国公立大学でも例えば大阪大学とか岡山、お茶の水、首都大学東京、筑波といったところがアドミッション・オフィスの入試の中で、例えば入賞した場合、金、銀といった場合とか、あとは一次試験を通った場合とか、幾つか、それぞれ学校によって違いますけれども、優遇措置をとって入学させていると、無試験で入学させているところがございます。

平岡副大臣 このオリンピックでいい成績をとった生徒の人たちの追跡調査みたいな、例えば今、一応よかった人が大学院でこういうことを専攻して、将来非常に有望だというような、そういうような追跡調査みたいなものは行っているのでしょうか。

板倉基盤政策課長 JST支援としてはまだ2004年からでございますので、就職までは追いかけるれないのですが、例えば大学4年生もしくは大学院に入ったところまでは追いかけておりまして、例えば数学のオリンピックのこれは入賞者ですね、東大の数学科に進学とか、大体皆さん理工系を中心に進学してございます。今後、大学院、さらにはドクターコースというふうに進学していけば、さらに追いかけていきたいと思っております。

金澤議員 今回の奥村先生がおっしゃったことが一つの大きな問題だと思うのです。どういうインセンティブというのでしょうか。つまり、底辺を広げるということはもちろんなのですが、トップのところをいかに育てるかということが非常に大事なことで、これは非常に大事なことが一つと、それからもう一つは、これ日本が非常に伸びているというのを示していただいたのですが、やっぱり同時に全体の中でどういう位置にあるかということを知っておく必要があると思うのですが。もちろんご存じなのだけれども、ほとんど中国が1位ですね。ほとんどの項目で。そこは同時にやっぱり言っていただきたいと思います。それと、韓国がもの凄く伸びているということですね。そういう中で日本も頑張っていると。

板倉基盤政策課長 そういう意味では、個人戦のコンテストだけではなくて、チーム戦のいわゆる科学の甲子園のようなものも行ってはどうかということで、23年度新しく要求を出させていただきまして、そういう競争の機会を広げていくということによってトップを引き上げていこうという施策を進めてまいりたいと考えてございます。

相澤議員 私もこの国際科学オリンピックの日本の委員会のメンバーでもあるので、これを進める立場ではあるのですが、少しお伺いしたいのは、当初、今科学コンテストと呼んでいますが、これらを国が支援するところが非常に脆弱であったので、ここの支援体制を強化するということが非常に重要だったわけですね。今、具体的にどの程度の支援が行われているのかを説明していただけますか。

板倉基盤政策課長 支援方策でございますが、JST、科学技術振興機構のほうから国内の支援団体に、これは先ほどお配りしました資料の各科目の下に、後ろのページの一番下のところに実施団体というのが出てございます。これは支援団体に対して支援をしてございまして、一応委託費の形で、大体1科目2,500万円程度でございますけれども、いわば共催のような形になるのですが、こういった団体に対して委託によって支援経費を支出していると。これで国内の大会の実施、さらには国際大会に送り出すための経費等々を賄ってございます。もちろん、こういった支援される団体もみずからお金を集めているということで、お互いお金を持ち寄ってということでございます。

相澤議員 それは2,500万円というのがコンスタントに毎年支援で。

板倉基盤政策課長 そうですね。独立行政法人でございますので、交付金の中で実施に合わせて支出してございます。大体それぐらいの規模で続けてございます。

中鉢議員 この候補になった生徒たちですね、追跡調査も興味あるのですが、事前の学習履歴とありますが、どういうようにしてこういう、元来もの凄くすぐれている生徒だと思うのですが、どういう勉強をしているかという、そういう調査はされていますか。

文部科学省 統計的な調査という形ではやっていないのですが、いろいろな話を聞く機会がございまして、やはり学校の勉強だけではなかなか満足し切れないという子供が多いです。い

るいろいろ聞きますと、例えば自分は日本科学未来館に行って、いろいろ自分で実験をする機会を得て興味を増したとか、科学館に行ったであるとか、あるいはスーパーサイエンスハイスクールの子供も若干おりまして、スーパーサイエンスハイスクールでいろいろな器具とかがあって、そこで化学の実験とかをすることによって興味を増したであるとか、そのような形で、通常の学習指導要領をさらに超えているいろいろなところで機会を見出して興味を増している。そして、強化合宿等々のどんどん上のステップに上がっていきますと、いろいろな先生方から手厚い指導を受けることができますので、そこでさらに能力を伸ばして、そして世界大会へ行っているという形になっているのだと思います。

奥村議員 実験と筆記試験があって、実験についてはやはり相当日ごろからやらないと、そんなに急に実験テクニックは上がらないですね。普通の公立高校はあまり実験するという話を聞かないので、やはり特段の努力しないとなかなか上位へ行けないですね。

文部科学省 そういう意味で、先ほどのこの後ろの3枚目の国際化学オリンピックのところの紙のところを例えばご覧いただければと思うのですが、この化学オリンピックに向けて、四角の3つ目で、国内選考についてという部分がございます、5ポツで強化訓練というところがございます。この中で強化合宿等々を、例えば化学の場合は4回程度行ってきて、ここで実験の練習等も鍛えてきているという形にはなっています。

相澤議員 これはむしろ指導する側が相当勉強しないとだめですね。普通の高校の授業でやっているようなやり方で教えるのではこのコンテストは勝ち抜けません。ですから、大学の先生が中心になって相当しっかりとした指導体制を組んでおられます。

平岡副大臣 中国はどのような教育をしているのですか。

金澤議員 中身は存じ上げないのです。数字といいますが、順位を年ごとに項目ごとに拝見ただけです。中国は常にほとんどがトップなものですから、すごいというのはあります。ただ、人数が多いから。

文部科学省 まず、受験者がかなり多いという形なのです。10万人規模で各教科ごとあります。そういう意味においては、分母が非常に大きいというのがございます。その上で、さらにいい成績をおさめれば、いわゆる大学への無試験という形のインセンティブもついているような形、あるいは、これは聞いている話ですが、国際数学オリンピック専用の塾があるとか、そのような形でかなり頑張っていると。

相澤議員 科学・技術ミーティング in 大阪のときに、その年の数学オリンピックで金メダルになった、当時高校3年が出席して、非常に厳しいことを言っていて、日本の高等学校の理科教育は論理的に理論を追求していく美しさを教えないと。そういうようなことを厳しく言っています。それだけ、逆に言えば、余裕を持って勉強しているというような、大変感心いたしました。

中鉢議員 今、日本でも、相澤先生がおっしゃったような、学校の授業だけではおもしろみがなくて、塾みたいところでそういうものを補完しているところがありますよね。ということは、高等学校の教育課程には、あるベーシックなところまでのものと、こういうもの、凄く卓越した生徒をどう育てるかの問題があると思います。オリンピックの金メダルをとったということと、本当にボトムとしての学力がどうかというのはまた別問題で、本来的には高等学校の教育課程にもう一回フィードバックしなければいけないのではないかと思います。

議題2. 準天頂衛星初号機「みちびき」について

< 文部科学省 佐伯宇宙開発利用課長説明 >

金澤議員 プリミティブな質問でまことに恐縮なのですが、大変いいお話を伺いましたが、この技術的なレベルですけれども、ロケットの話じゃなくて、機能としての世界の中でのレベルはどれくらいなのか。

佐伯宇宙開発利用課長 実は、これが初号機ですので、実証されたということではございませんが、この精度は多分世界トップレベルの精度を出すと考えてよろしいですね。

寺田宇宙航空研究開発機構準天頂衛星システムプロジェクトチーム・プロジェクトマネージャ この精度を決めるのは、衛星の軌道とそれからクロック、時計ですが、こちらの精度で位置がより正しく決まります。一応、目標としているところは、測距の精度が単体では1.6メートル、それからGPSとの時刻との補正を入れると2.6メートルということで、こちらのいわゆる測距精度については世界と比肩すると、劣るところはないというように考えています。

平岡副大臣 今、政権では新成長戦略というのをつくっていて、その中でもこういう分野の話というのは、たしか何かに位置づけられていたと思うのですけれども、どういう位置づけになっていて、それからその中で予算的なもの、資金的な面、そういう面はどのように位置づけられているのかというのを教えてもらいたいのですが。

佐伯宇宙開発利用課長 今、宇宙の分野も成長を意識しましてさまざまな文書が、成長戦略を検討する際にも宇宙分野はどういうところへ成長に寄与できるかという議論がございました。その中で利用がドライブする宇宙開発の利用によって成長を実現しようということを考えてございまして、一番わかりやすい形としては、画像というよりは地球観測衛星、この画像を使っていくというのがございますが、この準天頂衛星も、測位衛星もまさにそうした一つの分野でございまして、特に、衛星単体を売り込むということももちろんあるのですが、それ以上に地上型で非常に幅広い広がりがございます。日本はカーナビの使い方なども非常に進んでございまして、そういったナビゲーションということで、新しいビジネスも含めて展開できる。そのインフラとなるようなものだろうという位置づけはされてございます。

費用の点につきましては、まさにこの初号機を打ち上げるところまで700数十億円ございまして、そこを4省が分担してきてまいりました。もともとの計画では、第2段階は民間も一定の負担をしてやっていきましようかという議論をしてきたところでございますが、ただ若干、その計画を立てた段階では欧州の計画も官民の共同のプロジェクトだったのですが、その後、情勢の変化によりまして官主体のプロジェクトに変わってきてございます。そういったことも踏まえながら、どういう負担といたしますか、どういう役割分担が最適かということ、この政務官のプロジェクトチームでよく議論していこうという形になってございます。

本庶議員 またプリミティブな質問ですけれども、各国がこれを次々に上げると、例えばアジアで衝突しませんか。

佐伯宇宙開発利用課長 まさにその点につきまして、今一番進んでいるのはアメリカでございまして、次にロシアがグローナスというシステムでかなり基数を持ってございます。今、ガリレオシステムでEUがやり、アジアでも中国が上げ、インドも上げたということで、軌道の衝突ということもあり得るのですが、それ以上に周波数の干渉とかがございます。これについては国連のもとでの委員会がございまして、まず、第1は共存性、お互いに

干渉しないようにしましょうという目的の調査をしています。次に、お互いのデータをうまく両方を使うことによってより精度を上げる、より使いやすくするというような、共同利用性といったような、こういった議論まで行われているところでございます。

ちなみに、この準天頂に関しましては、GPSでは完全にうまく使えるようにということをお早い段階からずっと技術的な議論を続けてきてございまして、その意味では非常にアメリカのシステムとはうまい共同利用が可能のようなシステムがつけられているということでございます。ただ、そういった場合に、この準天頂を持っていることによって、我々も入ってさまざまな日本の意見を言うことができるという側面もございまして。

白石議員 中国は交渉に入ってきているのですか。

佐伯宇宙開発利用課長 はい。入ってきております。やはり一番交渉が難しい相手の一つだと言われている。

奥村議員 今回の衛星の寿命は何年？設計寿命でどのくらい期待されているのですか。

佐伯宇宙開発利用課長 10年以上です。

奥村議員 今回の衛星寿命を決めている要因は何ですか。

佐伯宇宙開発利用課長 基本的には燃料です。

中鉢議員 今、カーナビとかパーソナルナビゲーションと言ったらいいのかもしれませんが、そういうポータブルナビゲーションシステムでは、渋滞情報なども含めて日本は非常に進んでいまして、同じような端末デバイスを例えばヨーロッパで使おうとすると、今言ったような状況でなかなか日本のハイテクをそのまま生かせないという状況です。そういうインフラを向こうでも整備しないと、結局日本のビジネスを拡大していくというときに、日本ドメスティックでは非常にいいのだけれども、という問題も出てきます。できるだけ標準化が進むといいですね。

相澤議員 今回打ち上げた準天頂によって補完効果というのは出てくるかもしれないのですが、精度の点については依然として他の3機はGPSのものですよね。ですから、精度は今回の準天頂の打ち上げによってやはりそこも効果があらわれてくるのですか。

佐伯宇宙開発利用課長 まさに、そのGPSの信号にもほかの誤差情報が入るのですが、同じ日本の上空の電離層を通過していきますので、その誤差情報を準天頂が送ってくることによって、GPSも含めた全体の情報の誤差が一気に下がるわけです。

相澤議員 それは今回の準天頂が日本上空をカバーしている時間帯だけでなく、全時間帯についても。

佐伯宇宙開発利用課長 それはカバーしている時間帯です。

相澤議員 ですから、やはりそうすると3分の1。

佐伯宇宙開発利用課長 今の段階では。ただ、8時間というのは本当に準天頂に見える時間でありまして、もう少し高度が下がっても……

相澤議員 もう少し広いカバー。

佐伯宇宙開発利用課長 はい。時間的には長い間見られます。ただ、やはりそれは24時間というわけにはいきませんで、ぎりぎり12時間とか10数時間くらいまでは少し低いけれどもでも見られると。

相澤議員 その8時間というのは、これは始終動くのですかね。日中をカバーしているとか、そういうことではない。

佐伯宇宙開発利用課長 これはだんだんずれていきます。

相澤議員 だんだんやはり動くわけですね。

今までどうしてもこの宇宙開発については、ロケットでの打ち上げのほうに中心が行

っていましたが、総合科学技術会議も衛星の先ほど来出てきている利用、これについてもっと精力的に進むべきだということを随分検討し、いろいろなところに盛り込んでおりますので、ぜひその線を強化していただければと思います。今回の第4期の基本計画の中にも、最終的にどう書き込まれるかは別としても、この準天頂だけでなく、特に地球観測情報が、これは新たなイノベーションを生み出していく宝庫であろうと、こういうように考えておりますので、ぜひ先ほどご指摘になったようなことを幅広く展開していただければと思います。

金澤議員 7ページの左の上の図というのは、これ実際の話なのですか。オーストラリアのほうまでカバーしているのですか。

佐伯宇宙開発利用課長 はい。8の字になっていますので。

金澤議員 やはりそうなのですね。

佐伯宇宙開発利用課長 はい。アジア、オーストラリア。

金澤議員 そうすると、オーストラリアと共同するということではできないのかな。

佐伯宇宙開発利用課長 実は、オーストラリアとは既にモニター局をキャンベラの近くに置いてあるのと共同が始まってございまして、そこは我が国だけに閉じずにもう少し幅広い視野で、やっていきたいと思っています。

中鉢議員 トンネルに強いGPSだといいですね。トンネルが難しい。

佐伯宇宙開発利用課長 そうですね。そこはまたちょっと別なシステムで。

中鉢議員 あるのですか。

佐伯宇宙開発利用課長 同じ受信機でもって、シームレスにつながるような屋内用の小さな送信というの、この一連の中で開発を進めております。

中鉢議員 今は各社、補正技術などを活用してやっていますからね。

議題3．全体ヒアリング概要

< 須藤参事官説明 >

相澤議員 報告の中で、これは厚生労働省、総合科学技術会議からの指摘事項が特段なしというのはおかしいのではないかと思います。

須藤参事官 ここは、一番初めにいただいた資料が割と情報が不十分だったので、あんまりコメント、これではというようなお話があったので、その場でのコメントということではなくて。

相澤議員 そうではなくて、そのこと自体が大きなコメントですよ。

須藤参事官 わかりました。

本席議員 私の印象としては、ここで口頭で言われたことと、これはコメントと2つ分けてありますよね。だけれども、それはかなりダブっているから、これを分けるのはどうかと。

須藤参事官 あと、もう一点申し上げれば、基本的にこれを踏まえまして、最終的にこれを材料に総括的見解というものをまとめていくわけでございます。そのときにこれは当然まとめてやっていくわけでございますが、コメントシートにつきまして最終的に完全にまだまとめ切っていない部分がございますので、今回少し分けてさせていただいたというものでございます。

相澤議員 つまり、ここの整理として、総合科学技術会議の指摘事項のところには、総合科学技

術会議が今回この全体ヒアリングをやるときの基本姿勢としてこういうことを求めていますということを明確に言っているわけですね。それに対してちゃんと対応してくれているかどうかということが第1に重要な事項なので、そこに対して明確なコメントを出していることは、明確に記載されなければいけないというように思いますので、この整理の仕方はそういう点でもう一度見直してほしいと思います。

津村政務官 そのことにかかわるのですけれども、これというのはどこに配る資料なのですかね。

須藤参事官 基本的に、ここでお示しして、これをもとに最終的な総括的な見解というものをつくらうと思っています。

津村政務官 つまり、予算編成プロセスの可視化ということ、透明化ということ、今一生懸命やろうとしていて、その結果、若手の1,000人だ、パブリックコメントだということをやって、それは、名前でもいただいたものをできるだけこういう意見が来たからこうしましたということも公開しようとしているわけですね。それでいったら、この100人の方々の全体ヒアリングなんて、まさにできるだけ情報開示したい部分だと僕は思うのですよ。それがこういう状況だと、まさにこれも見せ方の問題なのですけれども、何だ、わざわざ総合科学技術会議、呼び出してやっていて、指摘事項もないのかと。これは府省のですけれどもね。だから、ここでの説明だけのためというのだったら、逆に他にどういう形で見せるつもりでまとめているかも見たいのですよ。見せないということではないのですよね。

須藤参事官 いえ、見せないということではなくて、これをもとに最後、総括的な見解というものをつくりましますけれども、優先度判定でまず総論的に総括的な見解、それとあとは個別のS、A、B、Cというようなものにするのですけれども、その中で各省に対する指摘事項というもので、そういう形でお見せするということだと。

津村政務官 それはだって優先度判定の最終形の話でしょう。プロセスを見せないのですか。

須藤参事官 政務官のご指摘は、この段階で各省に見せていないのかということでしょうか。

津村政務官 僕が言っているのは、各省でなくても、一般の方ですよ。

須藤参事官 これについても、当然今のご指摘を踏まえて直したものを最終的には、まだこれは未定稿ですけれども、最終になったものの概要はホームページに載せることは考えてございます。

津村政務官 これはホームページに載せるために書いている文章ですか。

須藤参事官 こちらは、資-1のほうをバージョンアップしたものを載せるということを考えてございます。その中、最終バージョンアップをしたときに今別途にしておりますコメントシートのもも入れていくということを考えてございます。

津村政務官 これも入れていくのですよね。

須藤参事官 はい。

津村政務官 それを見せていただくのが一番なのではないですかね。

須藤参事官 わかりました。

津村政務官 そういう観点でいうと、言いたいことはたくさんあって、これは非常にわかりにくいのですよね。これを一般の人が、なぜこのタイミングでこのヒアリングをしていて、そのときにどれだけ皆さんが一生懸命それを見てこういうコメントを出しているかということが伝わらないと、せっかく一生懸命国民の皆さんのために予算編成の中で汗を皆さんがかいていただいているということが外に伝わらない書き方になっていると思うのですよ。

須藤参事官 はい、わかりました。

中鉢議員 各省庁からのプレゼンテーションについては書いてありますが、このペーパーの質疑応答の状況だけを見ますと、総合科学技術会議というのは何ともブアで、黙って何の指摘もしていないように見えますよね。それで、コメントシートを反映させるにしても、会議のときには黙っていて、コメントシートに出てきたものをとすると、何か体裁を整えただけのようなプロセスとなって、好ましくない気がします。物も言わずに、コメントシートで出てきたところをまとめたという形というのは。あの場では本当に何時間もかけてヒアリングを行ったにもかかわらず、数行しかないということ、これを事実として伝えていいのでしょうか。後でコメントシートが出てきたので、ここは両方入れますという、この手法というのはいいのでしょうか。

須藤参事官 そこはまたご指摘いただければ。このまとめ方といたしまして、今の案は、あくまでも政策的な話でのご指摘というものをまとめさせていただきます、個別施策というか、施策とかの事実関係の確認ということもあの場では質疑応答であったかと思えますけれども、それはここでは今除かせていただいているということでございます。今、中鉢先生のお話ですと、基本的にはあそこであったご議論はできるだけ忠実に反映すべきであるということであれば、そういう形にさせていただきます。

相澤議員 これは、今、政務官からも指摘がありましたように、何のための報告かということなのです。だから、これを今回の優先度判定のプロセスで、全体ヒアリングというのがあり、それから個別施策についてのヒアリングがあり、それから外部専門家からのコメントを受ける仕組みもあり、いろんな形でこの優先度判定に取り組んでいるわけです。その全体像を見せ、その中の全体ヒアリングについてはこういうことで進んでいるというようなことで、きちっと体系的に外に見せていくべきだということですね。そのときにこういうようなものが非常に不完全な形で、断片をとらえたようなもので出ていくこと自体が、ゆゆしき問題を引き出すと同時に、理解を得られない。このところは根本的にやり方自体を整理するべきだというように思います。

須藤参事官 わかりました。いずれにしても、まだ途中段階でということで未定稿ということでお示ししましたけれども、今ご指摘いただきましたように、そもそも国民の皆様への情報提供という観点と総括的な意見の取りまとめという観点のところを若干ごっちゃにしている部分があったかと思しますので、そこは今のご指摘を踏まえましてブラッシュアップさせていただいて、また変えさせていただきます。

本席議員 特に厚生省に関しては、多くの委員から、一番厳しいコメントがあったと思うのですよ。全く全体像がなくて、去年と変わらないような話を何回も聞かされてという。それが特段なしと、僕らはみんなびっくりしているんですよ。

中鉢議員 これを見て、科学・技術予算がこうで、こう重点化してという数値的なものが記載されていて、でも最後に特段のコメントはないというのは、それは総合科学技術会議がワークしていないことを示すエビデンスでしかないことになってしまいます。つまらないではないですか、何時間もかけてやったのに。この議事録の1行にもならん行為を行っている、総合科学技術会議が。何のためにやっているのだと。

津村政務官 もう一つだけ言いますと、まさに今、中鉢さんや本席先生が言ってくださったことを言いたかったのですけれども、もうさらに一步言うと、もう我々はパンドラの箱をあけているわけですから、中途半端なことをしてはまさにだめで、さらに言うと、この厚生省がこれだけひどいということをさらしたいわけですよ。せっかく出すわけですから。生々しく厳しく言っているところを全部出していただいて、どれだけ報道されるかわからない。直接ホームページでクリックしたら出てくるわけですから。「こんなこ

とをやっているのですか、厚労省さんは」と。「こんな大事な場所でこんなしょぼいやりとりしているのですか」というのを逆に天下にさらすということに重要な意味があって、つまり来年厚労省はそういうことはできなくするという、そのための可視化なわけですから。しょうがないから出しているのではなくて、世の中に対して問題提起するために出していくわけですから、そこをうまく戦略的に、ちゃんとそこに目が行くようにいかないと、せっかくの大事なとんがった部分を丸めて出しちゃったんだったら意味がないわけですよ。

相澤議員 ですから、これを踏まえまして、今回のこの資料の1については、これは一応回収していただくほうが私はよろしいのではないかと思いますので。

須藤参事官 一応、まだ未定稿という形ではございますけれども。

相澤議員 ええ。未定稿だからこれは回収してください。

須藤参事官 はい、わかりました。

相澤議員 それで、今みたいな考え方できっちと整理して対応していただいたほうがよろしいかと思います。

須藤参事官 はい、わかりました。

議題4．科学・技術関係予算に関する若手研究者との意見交換会の結果について

<大竹参事官説明>

津村政務官 いきなり若手研究者との意見交換会というと、思いつきでやってみたいになっているのですけれども、もともとはこれ1,000人の若手のS、Aの皆さんに、もう皆さんにお認めいただいて現に進んでいるプロジェクトについて、予算、優先度判定のコメントをいただくという、既に1,042人のうち136人集まっているというご報告もありましたが、私の当初の感覚では、ただでさえお忙しい研究者の方々にほかの人の予算までチェックしろというのは、なかなか無理なお願いでもあるので、1,000何人のうち、普通にやったら50人ぐらいしか返事が来ないのではないかなというのを心配しまして、せっかくやるのだったら、こういう趣旨でやるのでぜひご協力くださいというのを、こちらから足を運んでお願いに行こうというところからスタートしてしまして、お願いにせっかく行くのだったら、できるだけ人の大勢いるところできちんとお願いして、ほかの大学の人にも伝えてくださいねということでやろうということだったのです。

メディアの方と少しお話をしたところ、そういうことだったら、もし大臣がそこに足を運ばれるということもあれば報道ベースにも乗りやすいし、そうすると、ほかの地域で見ている若手S、Aの人も、「ああ、自分のところに来たあのレターのあれか」ということで、さらに波及するかなということのをねらって、大臣にもお越しいただこうと。そうすると、大臣が今度は随分乗ってくださいまして、せっかく行くのに、ただの説明だけでは一方通行でつまらるので、せっかくだから来ている人の話も時間が許す限り聞こうではないかというように話が少しいいほうに膨らみまして、結果的に意見交換会という形になったのですけれども、もともとの趣旨は予算の1,042人にきちんと意見を聞きたいと、ぜひ意見を言ってくれという、その啓発活動から始まっています。

つまり、何が言いたいかと申しますと、その結果136人既に来ていますし、さらにこの後来ると思いますので、ぜひ優先度判定では十分にこれをご活用いただいて、メリハリを

きかせていただきたいということで発言させていただきました。

大竹参事官 細かいことですが、136件で多少人数がかぶっているの、だったらもう既に100人ぐらいは来ているということだと。100人を超えてきていると。この意見も少し整理をいたしますが、特に若手のところは非常に切実な訴えがありましたので。そういうこともぜひお含みおきいただければと思います。

中鉢議員 11ページの、そこに書いてある一番上から2つの欄があるわけですが、一応、以前から重複の排除と分散の排除を私は申し上げてきました。重複もいけないけれども、小ぶりのものになってもいけないのではないかと、こういう若手の人たちが同じようなコメントをしているというのは、今の総合科学技術会議の調整というかそういう機能が、伝わり切れていないのではないかと思います。さっきの話のところでコメントすべきだったのかもしれませんが、全体ヒアリングで、例えば各省庁の連携というものを、最初にアクション・プランのときも今回もお願いしているにもかかわらず、やはりそういうところはまだ不十分だなという印象を私は持っています。

それから、やはりオーバーラップしているもの、ここはこういうような調整をしましたというエビデンスがないと、こういう若い人たちに、それだけを見て、なかなかコメントしづらいのではないかと思います。やはりそのところがブラックボックスになっていて、どういうことが行われているのかということが見えにくくなっていると思います。そういう透明性を示す上でも、一つ一つに対してやはりきちっとアクションを起こして、そのエビデンスを示していくということが大事なのではないかなという印象を持ちました。全く同感なところというのは結構見受けられます。

ただ、多少これは東大という特殊性があって、どちらかというとも成功者ですよ、この人たちは。あまりネガティブな意見は持っていない方だと思います、こういう人たちは。ですから、それでも若手の閉塞感みたいなものを持っていて、これにどう反応するかということですが、若手であるとか女性であるとか外国人であるとか、私は研究者として弱者だろうと思うのですけれども、弱者に対して私は合理的な配慮というのはすべきである、しかし合理性を超えたところでの配慮がかえってそれが不公平にもなると思います。この辺は聞く側も注意して聞かないといけないのかなという印象を持ちました。

奥村議員 私の第一印象は、今中鉢さんが言われたように、ある意味では研究者として成功しているポジションの方ですよ。その方々が、しかも年齢層が若い方が予算のご意見を伺っているからそうかもしれないのですが、もう少しやはり工夫されていることとか、ポジティブな情報発信もあっていいのではないかという感じを持ったのですが、それにやや私は驚きを感じています。一番恵まれているであろう東大でさえ、こういうことしか出てこないということに私は驚いているという印象です。一般の人に勇気を与えるような、もっと前向きな発言があってもいいのではないかと思います。

大竹参事官 先ほど申し上げたのですが、こういうまとめ方で後ろの11ページ以降でいいかというのは、我々はやはり問題のほうを拾って、例えばご発言の中では、おっしゃるとおり、東大ということではなくて、科研費のS、Aをとられている方はやはり若手でもかなり成功している方です。そういうご発言はありました。自分は幸せであるというご発言もありました。ただし、同僚を見たときにこういう問題があるよということで、もしくは自分がここへ来られたのは何のおかげであるかというようなご発言もあったのですが、少し反省をいたしますが、どうしてもその後、問題を解決するにはどうしようかという観点で整理するほうの問題のところばかりが出て、よかったという点はまだ書いてない

のは申しわけありませんでした。

白石議員 だけれども、非常に重要な問題を僕は指摘されていると思うのですね。問題が指摘されていること自身はそれで非常にいいことだと思いますね。僕自身も実際若い人たちと話していて、例えば、これは12ページの若手向け研究資金の一番下ですね。やはり小規模でもいいからPIになれる制度が欲しいって、これもの凄く切実な意見ですしね。それから、13ページの人員不足の真ん中ですよ。東大の医系で、臨床の人というのは本当に自分の持っている時間の3分の1以下しか研究に使えないということをみんな言っていますしね。ですから、本当に深刻な問題がやはりあるのですよ。ですから、その辺はやはりぜひこういうのを機会にできることを考えないといけないと思いますね。

中鉢議員 関連しますけれども、おっしゃるとおりだと思います。全体的にそういうことを感じますけれども、ただ、少し気になるのが、12ページの若手向け研究資金の の下から2つ目、「大御所のところで消費されている」という、大御所という仮想の何かを持って、問題点を見えなくしているのではないかということも感じています。大御所が悪いのか仕組みが悪いのかということがはっきりしていないと思います。ですから、大御所かわりに若手がやればいいのか、あるいは仕組みを変えるべきなのか、あるいは仕組みをつくっている大御所が悪いのかということをもう一回分析しないと、若手対大御所のような対立の構図を作ってしまうと、改革をミスリードするのではないかなと心配しています。本当の大学の改革ということに進むならば、この弊害を取り除くことではないかなと思います。

青木議員 これ大学の方にも見せるのですか。

大竹参事官 まず今日の資料は公開になっていますから、皆さんごらんになれます。

それから、これいろいろあって、実は全部本人のお名前もわかっているのですが、こういう資料に名前を入れなかったのは、「あいつあんなこと言ったな」と言って後でいじめられるといけないので入れてないんです。

青木議員 ええ。もちろん、そういう意味で言ったのではなくて、この中の幾つかは、特にこの夫婦のことが出ているので私は思ったのですけれども。私、海外で、夫婦で雇ってもらったのですけれども、それは別に制度があるわけではなくて、研究科長がもの凄く積極的にそういう人をリクルートしたのですよね。ですから、大学でもできることが幾つかあって、もしかしたら大学の間の対話がうまくいっていないところもあるのではないかなと思うので、それは促進するという役割もこれはあり得るのではないかなと思います。

大竹参事官 この中には、やはり制度であるとか経営の中のいろいろな問題が十分ご理解いただいでないで指摘している部分もあります。

青木議員 そうですね。そうだと思いますね。

大竹参事官 ただし、今おっしゃったような努力は、例えば研究科長なり学部長なりがそうやろうと思うかどうか、それがリコmendされるかどうかというのは、別の意味で政策誘導があり得るのかどうかというのは、この件だけではなくてあり得るとは思うのです。

それからもう一つ、これは、ここに最後のページにありますように、理事であられる小島副学長がずっと席におられましたので、学長も冒頭15分ぐらいおられましたので、それからこの内容については大学のほうにもリターンしていますので、少なくともまず東京大学がこれは十分参照しているはずですよ。

青木議員 この前、高松のときには、愛媛大学では実際に夫婦を何人が雇っているという話を伺ったのですが。

奥村議員 参加された方々のバックグラウンドの内訳があるのですか？

大竹参事官 少し整理をいたします。ただ、大体文科系もおられましたし、文科系は少数なのですが、このS、Aがかなり大きい資金なので、少数なのですがけれどもおられました。教育系の方もおられました。それはまた出させていただきます。大体理工系のほうが多かったのですが、理、薬、工、医、農。

奥村議員 大体カバーされている？

大竹参事官 はい。20人大体カバーして、5、6人ずつぐらいという形になります。

相澤議員 いずれにしても、前の個別発言が整理されているもの、プラス、このまとめたものがペアで出るということですね。

大竹参事官 はい。ペアで出しておかないと、やはり読み足りないですよ、後ろだけでは。

相澤議員 もう少し注文をつければ、この頭にこの意見交換会って何だったのかという趣旨は説明が必要ではないかと思しますので。

大竹参事官 わかりました。

相澤議員 そこを少し加えていただくほうがよろしいのではないですか。

大竹参事官 中には大臣、政務官のご発言が書いてありますが、頭に四角で入れさせていただきます。それを加えてホームページに載せることにいたします。

金澤議員 このことは大変意義が深かったと思いますし、また大事な意見がたくさん出ているということも理解しておりますけれども、これは非常に特殊な意見、ある意味では特殊な意見であって、全体の意見とこれを間違えてはいけないと思うのですね。もちろん、自分の身の回りの人たちを見ていての意見もあるようですから、大事な意見もたくさんありますから、それはいいのですけれども。この項目立てというのは非常に大事な項目立てなので、これをもとにして、例えば政策研究所などで無作為にきちんとやるべきことなのではないかと思えます。つまり、これはある意味では意図的にエリートの人たちの意見を聞いたからです。それはやはり非常に偏った意見になる危険性があるのですね。ですから、何とかそれを全体の意見としてまとめる方向に少し考えたほうがいいのではないかという気がしますね。

白石先生はご自分でいろいろな若い方々とお会いになっているご努力をなさっているようですけれども、それでもなお偏りがあると思うのですね。私はむしろ、そういう声というか、普通聞かれないような人たちの意見をやはり取り入れるべきであろうとも思っているのです。そういう引っ張り出す努力をこれから何とかしたいと思っておりますけれども。最後に一言申し上げておきます。

大竹参事官 関係機関と話をしてみたいと思います。

(以上)